



『瀑布春陽』—透明水彩画—

鈴木 義勝

- レンタル絵画ワイエス・アート&絵画教室 主宰
- 青森市文化団体協議会副会長 ● 美術学科 昭和50年度卒

誌上
アート・ギャラリー

埼玉県出身の私は、縁あって34年前（1987年）青森市に移住してきました。以来、青森県の豊かな自然に魅了され、県内各地を散策しては絵を描き続けています。

全国的にも有名な奥入瀬渓流は県人のみならず絵を描く人なら誰でも一度は描いてみたいと思う魅力的な風景ですが、当初は「今更私が描くまでもない」と描いていませんでした。ところが数年後、私の描いた奥入瀬が観たいという意見を聞き「それも有りかな？」と描くようになりました。描いてみてわかったことは、とても難しくてとても奥が深くとても楽しいということでした。

この絵はその奥入瀬渓流にある銚子大滝です。春の陽光を浴びて光り輝く瀑布から観る者にやる気と元気を与えているように感じて頂ければ幸いです。





柴田 園子



2021.3.6 東奥日報より

人生が一本の芝居だとしたら、部屋は一幕の舞台装置なのだ。1990年代、世紀末の東京で学生だった自分にとって、同年代と思われる、幾多の生活者の居住空間を写した写真集「TOKYO STYLE」(京都書院アーツコレクション刊)は、小空間と身体を攪拌させて、何かを発信する感覚をよみがえらせるバイブル的な一冊だ。

ではスマホに入りがちな要素、アイテムが、モノという形で空間を占有していた。例えば、本や雑誌、CDやビデオテープ、壁という壁から本が生えているような部屋、積

都築響一写真集

「TOKYO STYLE」

デジタルネイティブ世代には、どう言えば伝わるのか。かつて、この世には携帯電話、スマホがなかった。連絡手段や情報収集としての機能も重要だが、もつひとつ、今



柴田さんが選んだ「TOKYO STYLE」

何か発信させる舞台装置

み重ねたレコードが地層になった部屋、色鮮やかな衣服がジャンгл状になっている部屋。それらの住人は、ミュージシャン志望のアルバイト生活者だったり、ファッションの学校に通う女子学生だったり…と、さまざまだ。一見、散らかっているモノだらけの部屋だが、何かをやりたい人たちの情念で練り上げられた迫力に、息を飲む。

ただし、これらの部屋は舞台装置も、一幕が下りればバラされて、跡形もなく消える。実際、掲載された部屋の9割は、刊行3年後には存在していない。住民たちは、結婚したり、郷里へ帰ったり、職替えしたり、人生のステージが進んだことによって、住まいを変えていったという。

91年、雑誌編集者であった都築響一氏はこの企画を思い立ち、知り合いの「普通の部屋」をまわって2年間、写真を撮りためた。出版社に売り込み、93年に刊行が実現。都築氏の出世作となるとともに、それまで被写体になることの少なかった、リアルな庶民の生活空間があらわになり、世間をあっと言わせた。

そこからの四半世紀、現代はモノを持たないミニマル主義に寄ったが、本書は見る者に語り続ける。「小さくまとまるな。ルールさえ守ればいいと慢心するな。散らかさずして創造ならぬ。笑われても怒られてもいいから、自分のやりたいようにやればいい」

(青森市文化観光振興財団学芸員)

動画で太宰に思いはせて



記念館のPR動画を撮影する「公開講座 奥津軽」のメンバー＝27日、中泊町の小説「津軽」の像記念館

市民団体 記念館PR、来月公開

五所川原

五所川原市金木町を中心に活動している市民団体「公開講座 奥津軽」（角

田周代表）は27日、新型コロナウイルスの影響で作家太宰治の生誕祭（6月19日）が中止になったことを受け、中泊町小泊の小説「津

新聞記事で見る

支部会員活動抄

軽」の像記念館をPRする動画を撮影した。少年期の太宰や、「津軽」に登場する子守の越野タケさんとの関わりについて、同会メンバーで元館長の柳澤良知さん（81）が紹介した。動画は約10分に編集し、6月1日から動画投稿サイト「YouTube」で公開する。

角田代表と同会メンバーの其田純子さんが進行役を務め、柳澤さんが太宰とタケとの出会い、少年時代のタケとの生活などを解説。

柳澤さんは「太宰は自分の母親を捜し求めている『津軽』でタケに会いに来るのは、それを確かめるため」と説明。「記念館には生前のタケの動画がある。小説で伝わりにくい人柄がよく分かるので一度、訪れてほしい」とPRした。

くしくも27日は、76年前の1944年、太宰が小泊村を訪れタケさんと会った日。角田代表は「生誕祭は中止になったが、動画で太宰に思いはせてもらいたい」と話した。

同会は、太宰や津軽森林鉄道などをテーマに講座を開催。DVDを作成し、五所川原市立図書館、つがる市立図書館、中泊町図書館で貸し出ししている。（令和2・5・28 東奥日報）

お知らせ

東京都在住の支部会員で文芸学科出身の大澤由喜さんが、昨年一月十四日急逝されたこと、夫人の大澤元子様から連絡がありました。ご冥福をお祈り致します。

『もくじ』に代えて

「にちげい青森」第16号をお届けします。本号は昨年しくなった会員の大澤由喜さんの追悼の記を、藤崎町在住の文筆家・世良啓さん（第1回東奥文学賞受賞者）から寄せて戴きました。会員の玉稿は柴田園子さん（演劇）、伊藤一郎さん（文芸）、十日市秀悦さん（映画）、他に活動の記録記事では角田周さん（音楽）、荒正典さん（写真）、山内史子さん（文芸）。他に表紙カラー頁には鈴木義勝さん（美術）が登場します。

ひと

散歩道

「FMアジュール」
番組パーソナリティー

あら
荒

まさ のり
正典さん(61)

ゲストに励まされ20年



むつ市で100年続く写真館の3代目。小、中、高校の卒業アルバム、制作で運動会や学習発表会、修学旅行の撮影をしていると、子どもたちと打ち解けて仲良くなる。学校生活などを語ってもらおうと、トーク番組「荒

さんの青春グラフィティ」が2000年10月2日にスタートした。むつ市のコミュニティFM「FMアジュール」で毎週月曜日に放送している。

「ゲストの人選は。スポーツ大会で優勝した生徒はスポットライトを浴びるけど、一生懸命やっているのに、なかなか結果を出せない生徒を見ている。スポーツ以外でも学校行事とかで一生懸命やっている生徒もいる。そんな頑張っている子どもたちを紹介した

いと思って。気になる子どもがいると、声を掛けて、番組に出てもらう」

「ゲストと、どんなことを話しますか。」

「修学旅行の思い出や海外研修、部活動、文化祭、田名部まつりのことなど、いろいろ。こちらから難しいことは聞きません。最後は褒めて前向きな言葉を掛けるようにしている。番組にシナリオがないから、ゲストは何をしゃべってもいい。間違ったら間違っただけでいい。ざっくりと言えればいい。ざっくりと聞いたらいい。そんな番組です」

「ゲストの一生懸命な姿に励まされたことがたくさんあった。自分も頑張らなきゃいけないと思った。いい人たちの出会いがあって、それが番組につながり、気がつけば20年もたっていた」

「出演した児童や生徒たちに言いたいことはありますか。」

「ちょっとくらい失敗したっていいじゃないか。くよくよするな。大きな目標を持って、それに向かって進んでほしい。番組で大好きなお祭りや友達のことを話してくれた。ふるさと愛を忘れないでほしい」

（令和2年11月10日）

東奥日報より

太宰の故郷・津軽

先輩&後輩の

今日はどこぞの
空の下？

27より

向きの観光で、もっと集客が期待できるコンテンツではないかと思う。斜陽館に加え、太宰がなにかと頼りにした旧傍島家（叔母の嫁ぎ先、現「かなぎ元氣村」）、疎開時少くない。

に家族と過ごして執筆に励んだ「太宰治疎開の家」、『旧津島家新座敷』、地獄絵図が見られる雲祥寺と、五所川原市金木町に限定しても縁ある場所は、赤毛のアド島（カナダ）、ピータ

作品と結びつく聖地

以前、ロンドンの出版社で働いていた時のこと。「ハルキが来てる！」という声がフロアに響き、皆が一斉に立ち上がった。ハルキとは、その村上春樹氏。ファンであるわたくしは当然、舞い上がったのだが、なぜかそこでひねくれスイッチ・オン。「急ぎのレターを打たなくちゃ」と、そのまま仕事を続けた。

冷静に考えれば、社内日本人は自分だけ。会話を交わせるかもと心が揺れたものの、変わり身は格好が悪いと意地を張り。「かわいかったね♡」（25年以上前のできごと）と笑う同僚を見て、己の偏屈を恨んだ。

ああ、若つていました。そのハルキ同様、海外に向けた翻訳版が数多く出版されてきた作家の代表格が、生誕110周年を迎えた太宰治。そう考えると、前回、木谷先輩が話していた外国人



太宰大先輩に原稿のダメ出しをされるわたくし……のように、斜陽館、かなぎ元氣村では太宰と記念撮影もできる

ーラビットの湖水地方（イギリス）と並ぶ、世界三大物語聖地なのですよ！とも叫びたい。今なお太宰人氣が高い国内でも、金木の充実ぶりをもっともっとひけらかしたいのだ。

一方で、太宰は暗い、という定説は根強い。しかしながら往年の雑誌「オリブ」にも似た可憐な美意識を感じさせる「女生徒」、夫婦の葛藤悲劇に滑稽なユーモアをにじませた「ヴィヨンの妻」のような、やわらかな作品も多々ある。

とりわけ皆さまにあらためて認識していただきたいのは、太宰の精神がずっと故郷とつながっていたこと。津軽に限らず青森県に生まれ育った方々は、作品の奥へ奥へと入りこめる特権を持っているのだ。文化や風習、

景色、冬の寒さ、方言、ちなみに、これほどま42^{キタ}が待機中。とさらには東京と故郷との距離感など、時には表現されていないことも感じない。わが家のテーブルでは今、工藤パンの「人間失格カステラサンド（令和元年7月12日）イギリススト風」(8 東奥日報より)

遊歩道『文芸のこみち』 伊藤 一郎

青森市栄町に「文芸のこみち」がある。旧東北本線跡地で、堤川に架かる松園橋から東へ伸びている。路の両側にいい感じの間隔で青森にゆかりのある先人たちの文学碑が連なっている。

私は、故郷の先人たちの賑やかな逸話のあれこれ思い出していた。

「文芸のこみち」の中でも一番好きな碑は、児童文学者・北畠八穂の碑だ。「夢を見ると必ず青森の町なみを歩いています。」鎌倉に居住していた頃のものか、こんなに儚く切実な郷愁に触れて衝撃を受けた。八穂は、太宰治と親交があった。賞を受賞した時に太宰からお祝いの葉書が届く。そこには一言「どってんしへしたじゃ」とあった。

菊谷栄は、青森市油川の出身で、

山内 央子
紀行作家・青森市出身
(令和元年7月12日)

昭和の喜劇王エノケンこと榎本健一の座付き作家だった。東京の川端画学校に学び、淡谷のり子がモデルに応じたこともあった。出兵の際、エノケンは舞台を中断して駅まで見送りに出た。戻るまでの間、観客は劇場で待っていたという。余談ながら、金欠病の太宰はよく菊谷を訪ねていたそう。

太宰と棟方志功のエピソードがある。東京県人会で太宰の自己紹介がほぼそそ始まった。棟方が「あのお、聞こえませう」と叫ぶ。太宰は「うるせえ！」と一蹴する。

棟方画伯は、八甲田山の鹿内仙人と仲が良かった。一日、仙人に自作の絵を見せると、気が置けないこの友人は一言「オラの孫より下手だな」と。笑い転げまわった棟方は、

畏友鹿内辰五郎の前にびたりと正座し「とうとう私も子供の域に達しました」と頭を下げた。

伝説の現場に居合わせたのが元酸ヶ湯社長の故大原公一郎さんだ。私は「演劇にしたい。具体的に教えてください」と詰め寄る。「そうだね、志功さんは左肩から倒れるように転がったね。」もうひとつ伺いたかった。「仙人が笛を吹くと神鷹が現れて、志功さんの頭上を旋回した」という話し。大原さんは「この時僕は丁度、仙人の背中におんぶされていたんだ。」そして「志功よ、お前は必ず偉くなる。」この仙人の一言に、棟方は頭上の鷹に手を合わせた。大原さんは「志功さんは近眼だから鷹は見えていなかったかもしれないけど」と笑った。

「文芸のこみち」の静寂は、先人たちの賑やかな声にあふれていた。

(グラフ青森「青森の暮らし」No. 429・2021年1月号より転載。筆者の伊藤一郎さんは文芸学科を昭和52年に卒業し、現在有線放送「青森ケーブルテレビ」で「青森ねぶた祭り」の生中継の司会進行などを担当している。)



十日市秀悦の

最終回 ⑫

泣き笑いの劇場

2015.3.12 東奥日報

ナベプロの発案で石塚英彦、恵俊彰と私でトリオを組むことになった。「ボンジャマカ」の前身、その名も「アラミテタノネ」（私もついこの間までこんな名前だったことを忘れていました!）。ツッコミの恵、中ボケの石塚、大ボケの十日市：みごとに売れなかった。楽屋は気まずいムードが漂う。二年ほどたった時、解散の危機を迎えた。ボケは二人いらない! 恵が石塚と私のどちらと組むかの話し合いになった。恵は私を指名し、石塚は恵を指名する。なかなか結論が出ず収まりがつかない! 思わず年長の私が



【写真上】筆者30歳頃。恵、石塚とともに「アラミテタノネ」で活動していた頃の1枚

「いいよ、オレ一人でもできるから」
 と言って解散した。ピンになったことを世話になったプロデューサーに報告に行くと、
 「もう東京も大阪も出尽くした。あとは地方から出てくるよ」
 と言われた。かわいがってくれた松本紳助さんには
 「芸能界はティッシュと
 同じやで。だからお前しかできないティッシュにならな。芸能界というところは席がちゃんとあるんや。その人が辞めたら次の人が入るようにできとるんや。だから十日市もチャンスが来た時座れるようにターゲットを決めてやらなあかんで」
 「自分だけのティッシュとは：そうか、私にはふるさどがある!」
 カメラと寝袋を携えて青森県一周の旅に出た。龍飛崎、十三湖、岩木山、白神山地、恐山、十和田湖：最後にたどり着いたのは、ふるさと八戸。
 まず陸奥湊に行こうと思いつき、着いたのは午前11時頃：人が歩いていない? それもそのはず。陸奥湊のピークは早朝4〜10時、来るのが遅すぎた。子どもの頃、父に連れて来られた時、イサバのカッチャに
 「ワラシ入るもんね!」
 と言われおっかなびっくり。ふと見るとパラソルの下に干しガレイを並べたカッチャが寝ている。「写真撮ってもいがべが?」
 とカメラを向けると、ゆっくり顔を上げ
 「買うのが?」「いや、写真だけ」「へば、だめだ!」
 とまた寝てしまったが、こっそり写真に収めた。東京に戻って旅の写真を見ているとアイデアが浮かんだ。
 「よし、これ演じるべ!」
 イサバのカッチャ誕生の瞬間だ。今の時代、大好きだった人情喜劇がない。笑って笑って最後にポロリ涙：登場人物をすべて一人で演じよう! ふるさとで懸命に働く人たちが主役の一人芝居が、東京の小劇場で幕を開けた。今まで演じたキャラクターは50人程。これをきつかけにふるさとに呼んでいただけるようになった。18歳で東京に出て、ついこの間まで帰郷は年に一、二度だった私がRABラジオやBeFMで毎週通うことができ、今あらためてふるさと青森県のすばらしさを新鮮に実感しています。ありがとうございます! 一年間お付き合いいただき心から感謝しています。またお会いできることを期待して、へば!

日本大学芸術学部
 校友会青森県支部

会報 にちげい青森 16号

令和3年5月15日 発行

日本大学芸術学部校友会青森県支部 青森市長島1丁目4-10 五拾壹番館内



疾走するイベントー

「大澤由喜氏を悼む」

特別寄稿

世良 啓



小柄な体にエネルギーが漲っていた。早口で熱く寺山を語る博学な行動派、そんな大澤由喜さんに出会ったのは2009年春である。寺山修司記念館の企画展「寺山修司と父八郎」への協力依頼があり、東京から来た大澤さんに弘前市内の寺山ゆかりの地を案内すると、近くに八郎の戦友の家があるから一緒に来てくれと頼まれ、取材に同行することになった。当時90歳を越えた藤田光雄さんは、満州や南方戦線の思い出をありありと語り、八郎の直筆サインつきの大切な写真を預けてくださった。こうした私の調査も大澤マジックで拡張・洗練され、父八郎の物語を立体化した見事な展示が完成した。「こういうのは全部大澤さんに任せれば大丈夫なのよ」と寺山の元妻、九條今日子さんも太鼓判だった。

寺山没後、西武で「テラヤマワールド」展を手がけた大澤さんは、三沢の記念館設立にも奔走し、常設展の机の引出しの中身から企画展まで、寺山の顕彰には欠かせない存在になった。特に青森県立美術館の「寺山修司劇場美術館」では文学・音楽・美術の境界を越えた大展示で観客を魅了した。常識を越え、ユニークで自由、見世物と知と鋭い問いを混在させる展示の秘密を聞くと「なにせ全部寺山さん仕込みだからね。せめて他と同じことはしないようにってね」と笑った。そして「あなた、何者なの？研究者になるより小説書くといいよ」と勧めてくれた。

大澤さんは六戸町や六ヶ所村で育ち、古間木小学校と青森高校で寺山修司の後輩となる。卒業後は日大芸術学部に進んだが世は学生運動真っ盛り。青高の同期、佐々木英明さんの縁で寺山に出会い、西武百貨店の「鏡の国のヨーロツパ」展、続くイランの「アラビアンナイト」展でイベントプロデューサーとしてデビューした。二つの展示は寺山が直々に書いた企画書で大澤さんが実体化したもので、その後、数えきれないほどの展示

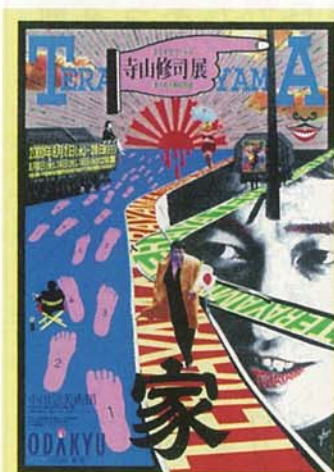
やイベントを生み出した。

さて日芸では、六ヶ所村周辺を独力で取材した卒論「青森の夢」むつ小川原巨大開発騒動記」を書き上げ、1971年の江古田文学賞を受賞している。鎌田慧の「六ヶ所村の記録」や核燃料サイクル基地稼働より20年早く、国策に翻弄される故郷の闇を浮上させた。論文には寺山の短歌を三首、



効果的に引用している。一昨年12月に寺山と弘前とイランの件で電話すると「もう寺山さんや展示の世界からは卒業したよ、お酒もやめたんだ」と新境地のすつきりしたお話ぶりで元気そうだった。だが翌月1月14日、仕事場へ向かう電車の中で倒れ、急逝された。享年70歳。父祖の地は海と菜の花の美しい陸奥横浜で、コロナが収まったらその土に還る予定だという。

1997年東奥日報に「寺山修司記念館を『装置』に」を寄稿した大澤さんは、「記念館」は寺山の思い出や業績を閉じ込める「墓」ではなく、寺山修司の「言葉」思想」を発信する「装置」としてこそ機能してほしいと書いた。その遺志はきつと記念館がある限り生き続けるだろう。



寺山修司展

テラヤマ・ワールドー
きらめく闇の宇宙

2000年8月2日(水)ー20日(日)

<8月8日(火)、14日(月)、15日(火)は休館>

開館時間 午前10時ー午後7時30分
(最終日は5時まで、入館は閉館の30分前まで)

小田急美術館 (小田急百貨店新宿店本館11階)

主催 「寺山修司展」実行委員会、小田急美術館
協力 青森県三沢市、寺山修司記念館、人力飛行機舎
ポスター・ハリス・カンパニー

ODAKYU

小田急・新宿

TEL.03-3342-1111 営業時間:10時-20時

〒160-8001 東京都新宿区西新宿1-1-3

http://www.odakyumuseum.com (小田急美術館ホームページ)